

スチュアート・スミス先生のこと

公益委員 長野信弘

2014年4月、英国コーンウォール州のカンボーンで営まれた葬儀に出席した。亡くなったのは産業遺産の世界的権威スチュアート・スミス先生。「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録に携わった海外専門家の一人で、この遺産の生みの親とも言うべき存在だった。訃報を受け「8県11市からなる世界遺産協議会として弔意を表わすため葬儀に出席せよ」という、突然の出張命令が下りて、慌ただしく渡航することとなった。

県庁世界文化遺産課は、出発までの短時日に各地のシンポジウムや調査時に撮影されたスミス先生のスナップ写真をアルバムにとりまとめてくれた。写真は2006年から2013年まで順番に並べられ、それぞれに日付と場所が記されていた。

葬儀会場のセンテナリー・メソジスト教会に「ガブリエルのオーボエ」が流れる中、式が始まった。驚いたのは、いずれのスピーチもユーモア溢れるものであったこと。弟のニールさんは「兄は並外れた収集癖の持ち主でした。幼い頃から気に入った石ころを集めていましたが、成長するにつれて石ころの方も段々大きくなってきて、ついには岩になりました。でも、岩って普通は家の中にあるもんじゃないので、家族はもう大迷惑でした」。

好奇心に眼を輝かせながら、岩を見つめているスミス少年の面影が思い浮かぶ。その後も、まるで結婚披露宴のエピソード紹介のようなスピーチが相次ぎ、会場はしばしば笑いに包まれた。これが英国流の葬儀なのかと恐れ入ったが

「あれは特別。スミスはすごくいいやつだったから、とんでもなく明るく、前を向く葬儀になった」と、先生をよく知る海外専門家から後になって聞いた。

式が終わって、スミス夫人に日本から持ってきた写真アルバムをお渡しした。夫人は一枚一枚丁寧に写真を見て、「家の宝にします」と言われた。

翌日、帰途ロンドンに向かう高速鉄道に、偶然ニールさんと乗り合わせた。ニールさんは「昨日はゆっくりお話する時間がなくて大変失礼しました。あのアルバムを見せてもらいました。日本の皆さんに兄はこんなに愛されていたのかと、家族一同とても嬉しく思いました」。

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」登録の始まりは、2002年、スミス先生が集成館を初めて訪問された時に遡る。先生は、「薩摩藩が外国人技術者の指導なしに、函面だけを頼りに自力で反射炉を建設した」という説明に驚愕して

「これらの産業遺産を日本の近代化のストーリーでまとめれば、間違いなく世界遺産になる」と言われた。たぶんこの瞬間に、稼働資産を含む産業遺産群を世界文化遺産に登録しようという、世界でもあまり類を見ないプロジェクトが人知れず始動した。

しかし前例なき取組に世の風当たりは強く、2015年の登録直前まで常に逆風の中にあった。ゴールできたのは、先生の桁外れな情熱と行動力が目に見えない力となって、背中を押してくれたからだと思う。登録の喜びを共に分かち合えず、感謝を伝えられないのは大きな心残りだった。

あれからもう10年になる。スチュアート・スミス先生、ありがとうございました。